

「或る「小倉日記」伝」における松本清張の仕掛け

——その「モチーヴ」に投影されたもの——

向井 佑輔

一 はじめに

「或る「小倉日記」伝」を読み終えた読者は、どのような読後感を抱くだろうか。主人公田上耕作の生きざま、その暗さや重さを直接つきつけられたように感じ、胸をふさがれる思いのした読者も多いのではないだろうか。そして、田上耕作が実在した人物であると知らされたら、驚くであろう。「或る「小倉日記」伝」は、実在した人物をモデルにした伝記的小説である。

主人公が学問や芸術の世界で功をなそうと努力するものの結局報われないまま終わってしまうという、「或る「小倉日記」伝」と同じタイプの小説を松本清張は近い時期に

いくつ公开发表している¹⁾。それらの作品をひとくくりにしてまとめた短編集のあとがきの中で、松本清張は次のように述べている。

この集の五つの短編には、それぞれ私の心を依託した人物を描いた。モデルとまではいえないが、そのモチーヴとなった人物は実在していた。(『風雪』²⁾あとがき)

「モデル」／「モチーヴ」という言葉の使い分けによって、事実に忠実な伝記ではなく虚構化が施された物語であることが示されている。そして、その虚構化は松本清張自身の強い感情移入による結果であることが示されている。

この文章からは、これらの人物を見つけ出し、いくぶんかの虚構化を通じて、彼らの生きざまを読者につきつけている、松本清張からの重々しい問いかけを感じることができるのである。

しかし、松本清張は、ある特集記事の中では、「或る『小倉日記』伝」の主人公に対して突き放した視点をとっている。

戦後になってほんものの鷗外のかいた『小倉日記』がでたわけです。(中略)そういう人間の才能が、本物がでたという結果によって全然意義がなくなってしまった^{〔3〕}。

耕作の行為が、「小倉日記」というモノの発見云々とは関係なく、まぎれもない彼の足跡として重みを持つこと。それが耕作の一生を追った作品が主張するものではないだろうか。ここでは、耕作の行為を「意義」がないと断定してしまっており、「軽率」な発言のように感じてしまう。そもそも、「小倉日記」と耕作の調査の成果が全く同じ内容になるはずはなく、大塚美保はこの回想に対して『小倉日記』

という「文書史料」を重く見積もりすぎている」と反論している^{〔4〕}。ここまで引用した二つの回想における落差は、一体何なのだろうか。松本清張は田上耕作という「モチーヴ」を通して何を見ていたのだろうか。

二 これまでの評価と本論の目的

前述したように田上耕作は実在した人物である。では、作中での耕作と実在した田上耕作との間にはどういう共通点と相違点があるのだろうか。先行する研究において、田上耕作の実像を明らかにする調査がなされ、そして、松本清張が田上耕作という「モチーヴ」をどう虚構化しているかが指摘されてきた^{〔5〕}。虚実の交錯から松本清張の手法を分析しようとする試みである。

そこで得られた成果を整理しておこう。田上耕作が身体にハンディを抱えていたこと、「小倉時代の鷗外研究家」であったことは間違いない。しかし、田上耕作の活躍は郷土史の調査、郷土玩具の創案、個人文芸誌の発行などにも及ぶ幅の広いものであり、小倉時代の鷗外を調査することだ

けが生きがいであるかのような作中の耕作とは大きくイメ
ージの異なる人物であった。田上耕作の最大の業績として
挙げられるのは、鷗外旧居の特定とそこに標木を建てた行
為であり、肝心なその点こそが作中では全く言及されてい
ない。田上耕作の実像を調査した轟良子は、「田上の「小倉
日記」は、体にハンディこそあったものの、決して暗鬱一
点ばかりではなかった」と指摘し、虚構化の手法を分析した
山崎一穎は「光よりも影に焦点を絞って造型していく清張
文学の原点」^{〔7〕}を見出している。

しかし、松本清張の虚構化の際の関心、ひいては作品の
魅力が、その「暗さ」（恵まれない境遇、どんなに努力しても
報われないこと）に求められて過ぎてはいないだろうか。「或
る「小倉日記」伝」は、類似する初期作品と同じく「学問
や芸術で功をなす」ということ自体の意味を真正面から見
据えた小説であり、その点が見落とされがちである。実は、
「轆轤不遇の生涯」「不遇への共鳴」という評価の大枠を作
った平野謙自身が、そちらの点も鋭く指摘していた。

注目すべきは、現世的な立身出世に望みを断念させら

れた主人公たちが、非現世的な学芸の世界に没入し得た
こと自体に、ほとんど自足していない点だろう。（中略）
彼らはそこから世俗からの独立、精神の自律を定立すべ
き内部的な方向には立ちむかわず、それを手がかりとし
て、ますます世間を見返してやりたいという現世的な保
証を学芸の世界に求めるようになるのである。^{〔8〕}

平野謙の指摘している点を、私なりに咀嚼すると次のよ
うになる。人を学問や芸術に駆り立てるものとして、仮に
その両端を定めるとするならば、純粋な学問や芸術への欲
求と世俗的な名誉欲が想定できよう。両者は複雑に入り組
んでいて、どちらか一方の欲求のみで学問芸術に打ち込ん
でいるという人物は存在しないだろうし、また、前者こそ
尊いなど言うつもりはない。しかし、人がその学問や芸
術への欲求において前者から後者の方へと比重を置いてい
くさま、その生々しさこそ、これらの作品に共通して描か
れたテーマではないだろうか。そういう側面を無視して、
主人公の「不遇」という結果ばかりを強調することはでき
ないだろう。

ただ、「或る「小倉日記」伝」を一読したところでは、耕作は純粹な文学青年であり続けたかのように読めてしまう。まわりの人から評価されることのない、極めて些細で先の見えない研究に、耕作は自分の全生命をかけていると思う読者も多いだろう。他の同系列作品に比べて、学問や芸術への欲求の質の問題がはっきりと描き出されているわけではないが、学問への欲求の質の変化は、作中の断片的な記述に中につかりと書き込まれている。

次章以降、作中の記述、松本清張の「モチーフ」を虚構化する手法、二つのレベルで学問への欲求の質の問題を分析していく。そうすると、松本清張の仕掛けた効果的な手法が浮かび上がってくるのである。

三 「鉾脈をさぐりあてた山師」

では、作中に書き込まれた耕作の変化とはどのようなものなのか、やや長い引用になるが見ていこう。

満三年間の「小倉日記」の喪失は世を挙げておしまれ

た。いよいよ失われて無いとなると、「小倉日記」は、そのかくれている部分の容積と重量を人々に感じさせたのだった。

耕作の心を動かしたのはこの事実を知ってからだ。幼時の伝便の鈴の思い出がはからずも鷗外の文章でよみがえって以来、鷗外を読み、これに傾倒した。いま、「小倉日記」の散失を知ると未見のこの日記に自分と同じ血が通うような憧憬さえ感じた。

耕作がいわゆる足で歩いて資料を集め、鷗外の「小倉生活」を記録して失われた日記に代えようとした着想はどうして得たのであろうか。そのころは柳田国男の民俗学が一般に流行しだした時だった。白川のグループの青年たちの間にも民俗学熱があがり、『豊前』という雑誌まで出した。同人たちは郷土から資料を「採集」し、毎号の誌上にのせた。耕作も初めは郷土誌の上から小倉時代の鷗外を考えていたが、民俗学の「資料採集」の方法を見て、しだいに「小倉日記」の空白を埋める仕事を思いついた。小倉時代の鷗外を知っている関係者を捜してまわり、どんな片言隻語でも「採集」しようというのだ。

耕作はこれに全身を打ちこむことにした。鉱脈をさぐりあてた山師のように奮いたった。一生これと取りくむのだと決めた。(五章)

もともと、耕作の鷗外好きは、幼時の思い出であった伝便の鈴のことが鷗外の『独身』に書かれているのを発見し、感動したことから始まっている。その感動とは、甘い鈴の音や初恋への感傷的な懐古であり、それと同時に、「あの時はでんびんやとは何のことか知らなかった。今、思いがけなく、その由来を鷗外が教えた」とあるように、「でんびん」と意味も分からず音で把握していたものが、後々に偶然手にした文献によってその役割や歴史性を知り新しく意味づけられるようになったという知的興奮でもある。これはまさにデュイイのいう「経験の再構成」⁹⁾であり、純粹な学問への欲求の原体験といってもよいのではないか。

そういう地点からスタートした耕作の鷗外熱は、「小倉日記」の空白を埋める」という目標を見つけることで世俗的な名誉欲を求める方へと比重を置くようになる。「鉱脈をさぐりあてた山師」という言葉に、耕作の変化が象徴的に

表れている。いわば、自己を慰めるための学問から、外に見返すための学問にかわるのである。

また、耕作は、K・M（モデルは木下李太郎）や森潤三郎という中央の権威によって認められることに狂喜しているように、作家の伝記的事実の補完という明確なテーマを設定し、その成果によって世間を見返してやりたいという思いを抱えている。「こんなことを調べまわって何になるのか。いったい意味があるのだろうか」と空しさに駆られてしまう場面が作中では二度あるが、それは、見返りを期待するようになつたゆえに生じる「産みの苦しみ」なのである。

ここまで見てくれば、耕作が何も見返りを求めようとしていない純粹な文学青年であつたとは読めないだろう。学問への欲求の質の変化は、松本清張が初期作品の中で執拗に描き続けたテーマであり、松本清張の大きな関心事であつたことは想像に難くない。そう考えるならば、ここまで指摘してきた耕作の内面の変化は、田上耕作の実像というよりも松本清張による虚構化ではないだろうかと思えてくる。果たして、実在した田上耕作は「小倉日記」の空白を埋めようなどと考えていたのだろうか。

次章では、「小倉日記」の空白を埋める」という発想は、松本清張が創作の過程で作中の耕作に思いつかせたものである、という仮説を立てて、田上耕作の実像と照らし合わせながら検証していきたい。

四 鷗外への視線の違い

実在した田上耕作が「鷗外研究家」であったことは間違いない事実である。新聞紙上で田上耕作の業績が幾度か報じられているが、そこでは田上耕作は「鷗外研究家」として紹介されているからである。そこからさらに問いを進めて、どういう「鷗外研究家」だったのか、という点を考察していきたい。結論から先に述べるならば、実在した田上耕作は、「小倉日記」の空白を埋める」ことを目的とした「鷗外研究家」であったとは言い難い。実在した田上耕作と作中の耕作では、同じ「鷗外研究家」であっても、その視線が微妙に異なっているからである。作中の耕作は「小倉日記」の空白を埋める」こと、いわば鷗外の伝記的事実志向する人であるのに対し、実際の田上耕作は鷗外の研

究を通してそこから小倉の風俗を辿ろうとしており、鷗外にまつわる情報を歴史資料として見る視点を持っている。

例えば、「鷗外漁史の小倉観」^{〔1〕}と題した文章では、鷗外旧居の場所を指摘し、さらに、鷗外の『独身』に当時の小倉独特の風俗として広告塔と伝便が挙げられていることを紹介したもののだが、現在の小倉と鷗外がいた頃の小倉を比べ、そこに連続性と断絶を見い出そうしている。また、「巷に聞く」^{〔2〕}と題した文章では、発見された鷗外遺稿に「摘髮所」という言葉があることを指摘し、「理髮店」「調髮店」などと看板の名前は変遷しても「髪を摘む」という方言は鷗外のいた四〇年前から今まで変わっていないと述べている。田上耕作が鷗外について書いた文章や田上耕作の鷗外研究の業績を報じた新聞記事は決して多くないが、それら进行分析する限りでは、彼の民俗学的な視線が抽出されるばかりであり、そこには「小倉日記」という言葉は全く出ない。

また、田上耕作の文章が最も多く存在するのは、小倉郷土会発行の雑誌『豊前』である。『豊前』誌面上に掲載された座談会にも度々参加しており、田上耕作の学問的なべー

スとして小倉郷土会があつたことは間違いない。その小倉郷土会とはどんな団体であり、どういう雰囲気のものであつたかを考えてみよう。

小倉郷土会会員であつた小林安司は次のように述べている。

工業地帯である北九州地方では地域の発展、展望にともない自市の歴史を回顧しようとして、昭和になると各地で地域に根づいた研究団体が誕生、小倉では柳田民俗学の流れをくむ医師で俳人の曾田公孫樹（引用者注、作中に出てくる白川医師のモデル）を会長として小倉郷土会が結成されて、機関誌『豊前』が創刊されたのは昭和十年（一九三五）年のことで、今から六十五年前になる。^{〔13〕}

また、鶴見太郎によると、柳田国男の「民間伝承の会」による地方の郷土研究会の組織化は、地方に在住し民俗・郷土を知ろうとする人たちの知的探究心に火をつけたといふ。^{〔14〕}じつさい、柳田国男の高弟である橋浦泰雄を迎えての座談会が『豊前』誌上に掲載されており、そこでは、文

書記録に残りにくく日々消失変化していく古風の習俗を採集する（耳で集める）ことの意義が説かれていゝ。^{〔15〕}

好きな学問研究を職業にすることもできず、また、向学心を刺激する要素の多い中央から遠く離れた所に住んでいる田上耕作のような地方の文化人たちが、当時の民俗学ブームに心を奪われたことは想像に難くない。そしてそれは、しばしば座談会や勉強会が催されていることから分かる通り、研究仲間と合つてやりとりすること自体に意義（楽しみ）を見出せるものであつたのではないだろうか。小倉郷土会の輪の中に入り込んでいた田上耕作の姿とたつたひとりで作家の伝記的事実の補完という明確な目標に向かつていく作中の耕作の姿は、対照的でさえある。

ここまで見てくると、実在した田上耕作の学問は純粹な欲求に支えられたものだと思えてならないのである。入手できる資料から組み立てて書くだけならば、純粹な向学心を持ち続けた地方の一青年の伝記にしかならないところであらう。そういう耕作に「小倉日記」の空白を埋めようとしてとさせることで、松本清張は学問における世俗的な名誉欲の要素を作中に据えようとしているのではないか。

五 「小倉日記」の空白の意味するもの

実在した田上耕作は、鷗外の伝記的研究を志向しておらず、「小倉日記」の空白を埋めようなどとは思っていなかったということをごままで論じた。そして、前章までは、小倉時代の鷗外の伝記的研究と「小倉日記」の空白を埋める¹⁾ことをほぼ同じ意味で考えてきたが、この章では、その差異について考えていきたい。同じような行為であっても、呼び方によってその意味づけが変ってくるからである。作中の耕作は、なぜ自分の研究を「小倉時代の鷗外の伝記的研究」ではなく「小倉日記」の空白を埋める²⁾と呼んだか。

そもそも、「小倉日記」の空白を埋める³⁾という表現は少し不自然である。「小倉日記」の空白⁴⁾という⁵⁾と、むしろ、「小倉日記」自体は存在するものの、その一部に破れて無くなったページや後から消されたページがあるという場合を想定してしまうのではないだろうか。「小倉日記」の紛失による鷗外伝記の研究上の空白（ブランク）を埋める⁶⁾の簡略化された表現と考えるべきだろう。そう考えると

尚更、なぜ⁷⁾小倉時代の鷗外の伝記的研究⁸⁾ではなく「小倉日記」の空白を埋める⁹⁾と呼んだのか、という問いが生まれる。

この謎を解く鍵は「空白」という言葉の意味にかかっている。鷗外の小倉時代は、なぜ「空白」と見なされるのか。それは、鷗外の小倉時代が、人々から知りたいと欲望されているからである。鷗外の小倉時代は、人々に欲望されているからこそ「空白」足り得るのであって、「小倉日記」が存在するはずなのに見つかからないという状況は、人々が鷗外の小倉時代を「空白」として欲望する気持ちをより増大させる付加価値的なものである。

鷗外の専門家は、「小倉日記」の有無という話題性とはかわりなく、小倉時代の鷗外を欲望する。それゆえ、耕作の研究を期待している。「小倉日記」に書き込まれている雇い女中の記述にひっかかりを感じ、その謎を追求する人物を主人公とした作品を松本清張は後に発表するわけだが、¹⁰⁾鷗外の専門家にとって「小倉日記」の発見は、むしろ新しい「空白」をもたらすものと言った方がよい。

一方、鷗外の専門家ではない多くの人々にとってはどう

だろうか。「小倉日記」が存在するはずなのに見つからないという状況下では、耕作の研究の価値は分かりやすいものとなる。また、鷗外の小倉時代は、後の作品への影響というよりも、小倉行きという冷遇に耐えそれを乗り越える当時の鷗外の心境の方に関心が向けられやすい。そのため、日記の代わりになる」というフレーズは魅力的なものとして映るだろう。

耕作が自らの研究テーマを「小倉時代の鷗外の伝記的研究」ではなく「小倉日記」の空白を埋める」と呼んでいるということは、一部の鷗外の専門家の期待に込めることを超えてより多くの人に自分の研究を認めてもらうことを耕作が想定していたことを意味する。「小倉日記」の空白を埋める」というネーミングは、自らの研究の商品価値を高めるための戦略であり、また、多くの人々に評価されることを夢見る世俗的な名譽欲の表れでもある。

そういう耕作にとって、「小倉日記」が発見されることは、自らの研究が多くの人から注目される可能性を失うこととして映るのではないだろうか。

「本物」が出ることで「意義」がなくなる、という一章で引

用した松本清張の回想は、実在した田上耕作へ向けられたものではなく、作中の耕作の心境を書き手自身が想像したものであり、松本清張によるその「モチーヴ」の虚構化の際の関心を示唆している。

[注]

- 1 「菊枕」『文芸春秋』一九五三・八）、「断碑」『別冊文芸春秋第四十三号』一九五四・一二）、「石の骨」『別冊文芸春秋第四十八号』一九五五・一〇）、「笛壺」『文芸春秋』一九五五・六）のこと。
- 2 一九五六年、角川書店
- 3 一九六三年五月二五日
- 4 『在る「小倉日記」伝——「実物」出現をめぐる——』『国文学 解釈と鑑賞』一九九五・二）
- 5 岩城之徳「初期小説とモデル——「或る『小倉日記』伝」と田上耕作——」『国文学 解釈と教材の研究』一九八三・九）、轟良子「もうひとつの「小倉日記」伝」『西日本文化』一九九一・九）によって田上耕作の実像が調査された。山崎一穎『或る「小倉日記」伝』論——事実と虚構の交叉——』『鷗外』一

九九七・一)は、その成果を踏まえて松本清張による虚構化を分析している。

6 注5参照

7 注5参照

8 平野謙「解説」『傑作短編集(一) 或る「小倉日記」伝』

一九六五・六、新潮社)

9 デューイ著、金丸弘幸訳『民主主義と教育』(一九八四・七、

玉川大学出版部)

10 「森鷗外居住の跡」という見出しの記事(『大阪朝日新聞』

北九州版、一九三八・二・二七)において、「小倉における鷗外

の研究者」と呼ばれている。また、「詠える町湯」という見出し

の記事(北九州市立中央図書館所蔵の切り抜き帳で確認できた

ものであり、新聞紙名や年月日は不明)において、「鷗外研究者」

と呼ばれている。

11 『福岡』(一九三五・一一、東西文化社)

12 『豊前』(一九三七・一一)

13 小林安司「小倉郷土会と松本清張」(『松本清張研究200

』11000・(11)

14 鶴見太郎『民俗学の熱き日々』(二〇〇四年、中央公論新社)

15 『豊前』(一九三六・四)

16 「鷗外の婢」(『週刊朝日』一九六九・九・二二)一九六九・

一〇・一二)、「削除の復元」(『文芸春秋』一九九〇・一)

※作中からの引用の際、底本は『傑作短編集(一) 或る「小倉日記」伝』(一九六五・六、新潮社)とした。旧字体は適宜現行の字体に改めてある。